

Philomusica

35



Colombine

Harlequin

15/II/2014

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「^{せき}咳工チケット」にご協力下さい。^{せき}咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。
なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

印刷のことなら

大 地 社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

T E L (075) 231-1727 (代)

F A X (075) 256-4604

京都フィロムジカ管弦楽団

第35回定期演奏会

京都芸術センター制作支援事業

2014年6月15日(日)

午後2時開演

京都府長岡京記念文化会館

1:15～ ロビーコンサート

❖ Programm ❖

ドミトリー・ショスタコーヴィチ (1906-1975) / 交響詩『十月』
Дмитрий Шостакович : "Октябрь", симфоническая поэма, соч.131

マックス・レーガー (1873-1916) / バレエ組曲

Max Reger : Eine Ballettsuite, Op.130

- I. Entrée
- II. Columbine
- III. Harlequin
- IV. Pierrot und Pierrette
- V. Valse d'amour
- VI. Finale

— 休憩 —

アレクサンドル・スクリャービン (1872-1915) / 交響曲第2番ハ短調

Александр Скрябин : Симфония № 2 до минор, соч. 29

- I. Andante
- II. Allegro
- III. Andante
- IV. Tempestoso
- V. Maestoso

(ヴァイオリン独奏：馬渕 清香)

指揮 柴 愛

指揮者

柴 愛 (しば あい)



同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏バイオリン専攻 卒業。

バイオリンを梅原ひまり氏に師事。

在学中より、ザ・カレッジオペラハウス、関西二期会、関西歌劇団などで、飯守泰次郎、牧村邦彦氏らのアシスタントを務める。

これまでに、モーツアルト「コジ・ファン・トゥッテ」、ドニゼッティ「ドン・パスグアーレ」・「愛の妙薬」、フンパードィング「ヘンゼルとグレーテル」などを指揮。

また、2014年ニューイヤーオペラファミリーコンサートではアンサンブル神戸と共に演するなど指揮者としての活動の場を広げている。

2010年ウィーン国際音楽ゼミナールにおいてAndres Orozco-Estrada氏に師事、ディプロムを取得。

これまでに、指揮を高階正光、Klaus Hoevelmann、Niels Muus、Alfred Eschweの各氏らに師事。

♪ロビーコンサート♪

13:15より

ベートーヴェン／惜別の歌 (Abschiedsgesang) WoO.102

Pos.：中村、藤井舞、宮下

…ベートーヴェンの作品としてはほとんど知名度はありませんが、ウィーンからドイツに旅立つ彼の友人のために作曲した作品です。短いながらもコラール／スケルツォ／コラールという3部分からなるユニークな構成と明るい曲想が特徴です。原曲は伴奏のない3声（2テナー、バス）ですが、今回はトロンボーン3本に編曲したものを演奏します。

タファネル／木管五重奏曲 より 第1楽章

F.：鳥山、Ob.：大玉、Kl.：黒田、Fg.：石塚、Hr.：黒田

…作曲者ポール・タファネルは、1844年フランスのボルドー生まれの音楽家です。パリ音楽院フルート科の教授でもあった彼は、作曲者としてのみならず、フルーティストとして、そして教育者として活躍し、フィリップ・ゴーベール、マルセル・モイーズなど、数々の優秀なフルーティストを育てました。記録によれば、彼は、豊かで魅力的な音色の持ち主であるとともに、楽譜に書かれたことに敬意を払い、その演奏は優雅であると同時に、拍やリズムなどが厳格に守られていたといいます。19世紀後半に作られたこの作品は、ロマン主義的な叙情に溢れ、各々の管楽器が柔らかに調和する木管五重奏の特長を活かした作品に仕上がっています。

ヨハン・シュトラウス2世 (船本孝宏 編曲) / 美しく青きドナウ

F.：高松、Kl.：関、Vn.：高谷、ハ木、Br.：高原、Vc.：秦野

…ワルツ王 ヨハン・シュトラウス2世の代表作の1つで、日本ではCMや演奏会でお馴染みの曲です。

ちょうど彼の半世紀後に活躍したレーガーやバレエ王 チャイコフスキイも彼の影響を受けたといわれています。次々に繰り出される軽やかで美しいメロディーをどうぞお楽しみください。

曲目解説

Tp. : 遠藤 啓輔

ショスタコーヴィチ／交響詩『十月』

ショスタコーヴィチ 61 歳の時の作品。晩年の作であるためか、青年時代を回顧するように自作からの引用がみられる。第 4 交響曲に聴かれる鋭い警報、第 6 交響曲に登場する騎行のリズムが効果的に用いられるが、後述するように映画音楽からの引用も重要な役割を果たす。短い交響詩の中にショスタコーヴィチの生涯が詰まっているかのような密度の高い作品である。

ショスタコーヴィチ 11 歳のときに起きた「十月革命」の 50 周年記念作とのふれこみで、1967 年に初演された。それでは「十月革命」とは何か、簡略に振り返ってみたい（ニコラ・ヴェルト（遠藤ゆかり訳）知の再発見双書 117 『ロシア革命』創元社、2004／栗生沢猛夫『図説 ロシアの歴史』河出書房新社、2010／下斗米伸夫『図説 ソ連の歴史』河出書房新社、2011などを参考文献とした）。もっとも、僕にとってロシア史は専門外なので、以下で概説する内容には誤解や偏見があるであろうことを予めお断りしておく。

今からちょうど 100 年前、1914 年に始まった第 1 次世界大戦への参戦で、ロシア帝国の経済は破綻、首都ペトログラードでは労働者の解雇がなされる一方、政府や議会は機能せず、民衆の不満が高まっていた。1917 年の 2 月（ロシア暦。以下同じ）、デモ隊に軍が発砲する事件が起きるが、自国民を撃ったことに対する悔恨から兵士の反乱が起き、ペトログラードは混乱に陥る。この時、皇帝ニコライ 2 世は戦争指揮のためペトログラードを離れていた。1905 年の「血の日曜日事件」（ショスタコーヴィチはこの事件を題材にしたとされる交響曲第 11 番を作曲している）で大勢の市民を殺害して以降、民衆の支持を失っていた皇帝は首都に帰ることができず退位し、王朝が終焉した（二月革命）。「二月革命」後は、帝政時代の議会を母体とする「臨時政府」と、革命家による「ソヴィエト」（評議会といった意味のロシア語）が並立する二重権力状態になっていた。このような状態にありながらも第 1 次世界大戦は継続中であったが、戦争への忌避感が高まり、脱走兵が急増した。こうした中、国外亡命中の身でありながら第 1 次世界大戦反対の立場を表明した革命家レーニンが人々の賛同を集め始めた。8 月、軍内部でクーデター騒ぎが起きるも失敗、レーニンが所属するボリシェヴィキ（「社会民主労働党」の中の一派）はクーデター鎮圧に助力し、影響力を強めた。レーニンはボリシェヴィキ単独の権力の確立を目指して亡命先からひそかに帰国し、武装蜂起を画策する。この計画はリークされ、連日のように新聞に書き立てられた。

このような中で、同じ 1917 年の 10 月 24 日から 26 日にかけて、ついに「十月革命」が起きた。ボリシェヴィキが武装蜂起の計画を実行に移し、巡洋艦オーロラ号とペトロハバロフスク要塞から砲撃がなされる。オーロラ号が放ったのは 1 発の空砲だけで、ペトロハバロフスク要塞からも数発の砲弾が不正確に放たれただけだった。それでも臨時政府の兵士たちは無抵抗のまま逃散。「冬宮」と呼ばれる宮殿にいた臨時政府の閣僚は逮捕された。同時に行われた全ロシア・ソヴィエト会議は、ボリシェヴィキによる新しい政府「人民委員会議」（レーニンが議長）の創設を認めた。

これが「十月革命」のあらましであるが、ショスタコーヴィチ作曲の交響詩『十月』は十月革命 50 周年の記念作品である。「十月革命」がその後の 50 年間に何をもたらしたか、ということも知っておく必要があろう。

革命の翌月、憲法制定会議の選挙をおこなうが、ボリシェヴィキは多数派獲得に失敗、レーニンは同会議を解散し、早くも一党独裁の道を歩み始めた。1918 年に第 1 次世界大戦は終結したものの、国内諸民族の独立戦争や外国軍による干渉戦争（日本のシベリア出兵など）が起きた。レーニンらは戦争状態にあることを理由にして強権を振る。農村から強制的に食料を簒奪し、反対派の知識人を国外に追放した。レーニンの死後、権力を握った

スターリンは工業化、軍事化を強硬に推し進め、国内は飢餓状態にあるのにもかかわらず外貨獲得のために小麦を輸出した。こうした強引な政治は当然さまざまな軋轢をひきおこすが、スターリンは肅清による恐怖政治によって権力を維持。密告が奨励され、相互監視態勢が敷かれ、拷問が日常的におこなわれたという。スターリン統治下において、ともに数百万といわれる餓死者と刑死者が出たとされる。革命家であるはずのスターリンは、むしろロシア皇帝の専制をモデルに統治をおこなっていたらしい。スターリン率いるソヴィエト連邦は第2次世界大戦に勝利するが、敗戦国よりも深刻な二千数百万人の犠牲者を出しての勝利であった。とりわけ、ショスタコーヴィチも当事者であった「レニングラード包囲戦」では二百万人以上が飢餓などで死亡したとされる。1953年にスターリンが死ぬと、フルシチョフが権力闘争に勝利。1956年、フルシチョフはスターリンの失政や恐怖政治を批判した。これによりソ連社会に『雪解け』とも呼ばれる一時的な緊張緩和の雰囲気が生まれ、詩人エフトウシェンコ（彼の詩にショスタコーヴィチが曲をつけたのが交響曲第13番『バビ・ヤール』である）ら文化人の活動が広まった。しかしフルシチョフの政治は、自然条件を無視した農地拡大などの場当たり的な失政であった。結局フルシチョフは1964年にブレジネフらによって解任される。これが「十月革命」がもたらした50年のあらましである。

ショスタコーヴィチは「十月革命」にちなんだ作品を生涯に3曲も書いている（交響曲第2番、交響曲第12番、そして交響詩『十月』）。彼がこれほどまでに「十月革命」というテーマに執着したのは何故か？このことについて次回演奏会でさらに深く考えてみたい。

交響詩『十月』は重々しい弦楽器のうめき声と管楽器の悲歌とが交錯する暗澹たる序奏で始まる。

アレグロの主部はワルツ風の3拍子になるが、鬱屈した寂しさは変わらない。踊りのパートナーは死神なのかとさえ思われる。舞曲はやがて怒りのこもった苛烈なものへと変貌し、炎のようなサラバンド風の伴奏さえ伴う（譜例）。サラバンドは[強・強・弱]のリズムによるスペインの舞曲だが、この時期ショスタコーヴィチはスペインに深い関心を寄せていたようで、2年後に書かれた最高傑作・交響曲第14番『死者の歌』にはスペインを舞台にした詩が使われる。フランコの軍事独裁政権下で苦しんでいたスペインの名もなき民衆たちに、ショスタコーヴィチは同様の境遇にある者として共感を覚えていたのかもしれない。



譜例 サラバンドを彷彿とさせるリズム

3拍子の舞曲は、大砲の連射のような複雑な変拍子を経て、木管による4拍子の歌を導く。この旋律はショスタコーヴィチが青年時代に書いた映画音楽の中の「パルチザンの歌」を引用したものという。再現部ではイングリッシュホルン主体で「パルチザンの歌」を歌う。ファゴットでもなければオーボエとも異なるイングリッシュホルンの音色は、寄る辺の無い不安定さを感じさせる。喻えて言えば、生きている人間でもなければ天国に迎えられた死者でもない、怨念を抱えたままこの世をさまよっている魂のような印象を受ける。ショスタコーヴィチはおそらくシベリウスやベルリオーズとともに、イングリッシュホルンのこのような音色の性格を最も効果的に生かした作曲家だろう。特に交響曲第11番では、惨殺された無辜の市民の魂が告発するような凄みのあるソロを聴かせる。この『十月』におけるイングリッシュホルンの活躍も、そうした声なき声を「パルチザンの歌」を借りて告発しているように感じられる。

曲の終盤はここまでに提示された主題群が大オーケストラによって威圧的に鳴らされ、最後は劇的に明転して絢爛たるファンファーレで閉じられる。まるで「さあ喜べ！　褒め称えよ！　喜ばない奴は反革命的だ！」とも言わんばかりの輝かしい終結である。

レーガー／バレエ組曲

大阪には誇るべき音楽祭が2つある。ひとつはもちろんフェスティヴァル・ホールを舞台とする春の大阪国際フェスティヴァル。そしてもうひとつが、御堂筋界隈の街全体を舞台とする夏の大坂クラシックだ。とりわけ大阪クラシックは、音楽のみならず、会場となる大阪が誇る名建築の数々をも楽しむことができるという、大阪を満喫するイベントだ。また、演奏される音楽も、演奏家たちが個人的に偏愛する作品を思い入れたっぷりに演奏するという、通常のコンサートやリサイタルとはまた異なる楽しさがある。我らがトレーナー・岩井英樹先生（大阪フィル・ヴィオラ奏者）も、演奏のみならず真摯な人柄がにじみ出るトークで聴衆を魅了する大阪クラシックの人気者だ。去る2013年度の大坂クラシックで僕がとりわけ魅了されたのは、初めて聴いたマックス・レーガーの作品だった。この年は友永健二・飛田千寿子・大町剛の関西フィル弦楽トリオと、大阪フィル・チェロ奏者の石田聖子がそれぞれレーガー作品を演奏した。オルガニスト出身らしいコラール風の歌とカッチリとした生真面目そうな形式感が目立つが、それでいて和声には挑発的で危険な色彩がある。そして何よりも、全体にどこか不安げな緊張感が漂っているのが印象的だった。こんな素敵なお曲を書く作曲家なら、相當に面白い管弦楽作品を書いているのではないか？と思って探し出したのが今回演奏するバレエ組曲である。そもそもレーガー自体、演奏機会が少ないので、ひょっとしたら今日の僕たちの演奏がバレエ組曲の日本初演になるのではないか？とも思っている（もしもこの曲に関する情報をお持ちの方がおられたらご一報お願いします）。

レーガーは1873年にドイツのバイエルン州で生まれるが、生後一年で引っ越し、以後ドイツ各地に活動拠点を移す。最期は旅先のライプツィヒで客死しており（1916年）、いわば旅から旅への人生だったようだ。ブルックナーの音楽からは農村の優しさが、シューベルトの音楽からはヴィーンの典雅さが聞こえてくるのとは対照的に、レーガーの音楽からは故郷の響きともいいくべき安心感のある音が聞こえてこない。僕が初めてレーガーを聴いたときに感じたピリピリとした不安感は、故郷を持たない者の孤独なのだろうか。そのかわりレーガーはカトリックの信仰を拠り所にしていたようで、少年時代から教会でオルガニストとして活躍する。そして、バッハ、ベートーベン、ブラームスを範とする厳格な音楽教育を受ける。一方で『トリスタンとイゾルデ』などヴァーグナーの半音階和声から大きな影響を受けるなど、和声法は斬新なものであった。こうした過去を尊重する立場と先進的姿勢の二面性を持つ独特な作風は、しばしば敵対者を生むことにもなる。

オルガンだけでなくピアノも得意だったレーガーは室内楽のピアノ奏者としても活躍。当初は音楽教師として活躍するが、1911年にハンス・フォン・ビューローの後任としてマイニンゲンの宮廷オーケストラの指揮者となった。当初は絶対音楽ばかり作曲していたレーガーだったが、マイニンゲンの指揮者になって以降、描写音楽の作曲にも手を出すようになる。僕たちが今日演奏するバレエ組曲は1913年の作品であり、こうしたレーガーの作風拡大期の作品と言えよう。

このバレエ組曲は6曲からなり、そのうちの3曲にはコメディア・デラルテやハーレクイン無言劇でおなじみの道化師たちの名前が冠されている。コメディア・デラルテは旅芸人による即興的な喜劇で、16世紀から17世紀にかけてヨーロッパ各地で人気を博した。お約束の登場人物がお約束の基本ストーリーに従って即興的に演じるというもので、役者にはシビアな演技力が求められたものと考えられる。一方、ハーレクイン無言劇は17世紀以降にイギリスで人気を博したパントマイムである。台詞なしで人物の性格を表現する確かな演技力が求められたことであろう。このバレエ組曲は、描写音楽に挑戦し始めたレーガーが、人間の性格という困難な対象を音楽によって描写しようとした意欲作と言えよう。オ

一ケストレイションはトロンボーンや特殊楽器を使わない2管編成の簡潔なものだが、その中にあってトライアングルのきらめきが異彩を放つ。この点はブラームス4番の第3楽章からの影響をうかがわせる。

第1曲は前奏。開幕にふさわしい澁刺とした音楽だが、その晴れやかな表層の奥で様々な要素が複雑に絡み合って音楽的厚みを出している。特に4連符と3連符が同時に鳴らされる部分が多く、軋むような異常な緊迫感を生み出している。バロック音楽のような爽快感と胸騒ぎがするような緊張感とを同時に抱えた、レーガーの独創性をお楽しみいただきたい。

第2曲は「コロンビーナ」と題されている。コロンビーナは女の召使いで、生まれながらの知恵と美貌を持っている。恋人のハーレクインとの関係を父親のパンタローネ（かなり年上の夫、とする設定もある）に邪魔される悩みを抱える。こうした魅惑的な人物像を、ヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』を彷彿とさせる、ゆったりとした息の長い旋律で表現する。

第3曲はコロンビーナの恋人「ハーレクイン」。開放的性格で人を疑うことを知らず、常に前向き。いわば「永遠の子供」といえる。コロンビーナとの恋を彼女の老父に邪魔されるが、妖精や魔法の杖の力に助けられて迫害から逃れる。天真爛漫な明るい性格がスピーディーな音楽で表現され、道化のトリックスター的破壊者としての性格が暴発するような破天荒な音楽で見事に描写される。とりわけ人を食ったような終わり方をお楽しみいただきたい。

第4曲は「ピエロとピエレッテ」。同じ道化とは言っても、先のハーレクインは裏表のない性格だったので対し、ピエロは陰のある道化と言えようか。レーガーが活躍していた時代、男女のピエロが歌い踊りながら冷やかしを言うピエロ一座が保養地などで公演していたという。こうした風刺を言う道化師は、人間の裏の裏まで見通しているように思われる。この曲は、最も人間臭い音がする楽器であるチェロのソロが主役となる。慈しむようにゆったりとしたテンポは、人間のおぞましい内面まで知り尽くしながらも、そんな人間たちを笑いによって癒そうとするピエロたちの優しさを思わせる。

第5曲は「愛のワルツ」。音楽事典やインターネットでレーガーを調べたことのある方は、阪急ブレーブスのブーマーのような巨大を窮屈そうにコンソールに押し込んでオルガンを弾く巨漢レーガーの写真をご覧になっているかもしれない。しかし、「もしや象の踊りのような冗談音楽なのでは？」などといった先入観を持つなけれ。マイニンゲンの宮廷樂長時代、レーガーが指揮するシュトラウスのワルツは「比類のない優雅な演奏」と評されたというのだ。レーガーにとってワルツは得意中の得意なのだろう。今日演奏するワルツも、自信に満ちた典雅なワルツだ。どうぞ、ヴィーンにいるつもりになってお楽しみいただきたい。

第6曲は終曲。元気の良いプレストの音楽で、人間の素晴らしさを称揚するような大団円である。

昨年、僕がレーガーの実演に接してその魅力に初めて気づいたように、今日の僕たちの演奏を聴いてレーガーの魅力に気づいていただけたら嬉しい。このようにして音楽の喜びが拡散していくことを願う。

スクリヤービン／交響曲第2番ハ短調

ショスタコーヴィチがソヴィエトの歴史を背負った作曲家であるのに対し、スクリヤービンはそれより一世代前、帝政ロシア末期の作曲家ということになる。1872年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院に学び、ピアニストとして頭角を現す。若くして演奏旅行で西ヨーロッパを訪問し、ヴァーグナー、リスト、

フランク、ドビュッシーなどの影響を受ける。帰国後は1903年までモスクワ音楽院でピアノ教師をしたが、その傍ら、作曲もおこなった。交響曲第2番はそのころ、1901年の作品である。29歳という青年期の作品ではあるが、43歳の若さで死去したスクリヤービンとしては壯年期の作品と位置付けることができるかもしれない。また、スクリヤービンはこの翌年から哲学やオカルトめいた秘教学に傾倒しだし、その発想が作品にも影響を落とす。そうした独善的世界に没入する直前の、西洋音楽の伝統的形式美を踏まえて書かれた交響曲がこの第2番である。

とはいって、ハイドン以来の、起承転結に則った4楽章という交響曲様式とは異質であり、楽章数は5楽章を数える。ただし、第1・第2楽章と第4・第5楽章は続けて演奏されるので、第3楽章を中心とした3部形式と取ることが可能である。こう見ると、3楽章形式の傑作交響曲であるフランクのニ短調交響曲を彷彿とさせるものがある。また、第2楽章と第4楽章が共通の雰囲気を持っていることから、第3楽章を中心としたシンメトリカルな楽章構成とみることが可能であり、しかも、第3楽章自体がシンメトリカルなロンド形式をとる。このような多重構造のシンメトリーは、マーラーの交響曲（巨人のハンブルク稿、5番、7番、10番）を彷彿とさせる。ほぼ同世代といえる両者に影響関係があったのかどうかは僕にはわからない。しかし、起承転結に則った音のドラマという美意識とはまた別に、均整のとれたシンメトリーを尊重する美意識の潮流も存在したのではないか、と思われる。ベルワルドのサンギュリエール交響曲、フランクの交響曲、そしてマーラーやスクリヤービンの交響曲はこうしたシンメトリーの美学が結実した作品と考えて良いと思う。

楽器編成はこの時代の管弦楽作品としては異例なほどシンプルである。しかしオーケストレーションは独特で、とりわけ複雑な対位法と個性的な和声が印象的である。複雑な対位法は、多数の要素が「絡み合う」というよりもむしろ、互いに無関係な旋律線が同時並行的に流れている、という印象を受ける。まるで、草村を吹く風と雲を流す風が全く別方向に吹いている嵐のようだ。また、スクリヤービンは「C（ド）の音は赤に見える」といったように音から色を連想する人だったらしい。不協和音を多用した不思議な和声は、絵の具を混色した渋い色彩を志向していたのかもしれない。

第1楽章は冒頭、クラリネットの旋律で重々しく始まるが、この主題（譜例）はイデー・フィクス（固定楽想）として各楽章に顔を出し、巨大な全曲を見事に統一する。堂々とした遅い楽章で、伝統的な交響曲を聴き慣れた聴衆は「遅い序奏がアレグロの主部へと劇的に変化するだろう」と期待する。しかし、その期待を裏切り、曲の雰囲気がそれほど大きく変わることなく、遅いまま静かに閉じられる。いわば、第1楽章全体が巨大な序奏のような役割を負っている。この点はロシアの後輩作曲家・プロコフィエフの第5交響曲へと受け継がれているのかもしれない。

The musical score example shows the beginning of the first movement, specifically measures 2 through 5. It is for Clarinetto in A, marked 'Andante' and 'serioso'. The key signature is A major (no sharps or flats). The time signature is 2/4. The dynamic is 'p' (pianissimo). The melody is played on a single line with various note heads and stems, showing eighth and sixteenth note patterns.

譜例 第1楽章2小節目～4小節目のクラリネットの主題

第1楽章から切れ目なく続けて演奏される第2楽章は、一転して嵐のようにスピード感がある2拍子の音楽になる。要所で打ち付けられるヘミオラ（2拍子の音楽の中に3拍子的リズムをはめ込むシンコペーションの一種）が急ブレーキをかけるような効果を出す。なお、聴き取れないほどの弱音で銅鑼が一度だけ鳴らされるのが意味ありげである。

全曲の中心に位置する第3楽章はロンド形式を取る雄大なアンダンテの楽章。ロンド形式とは、[第1主題—第2主題—第1主題—中間部—第1主題—第2主題—第1主題]という7つの部分からなるシンメ

トリカルで巨大な音楽である。したがって非常に長大な印象を与えるが、第1主題と第2主題はテンポも曲の雰囲気も大きく異なるので、決してとらえどころのない冗長な音楽にはなっていない。主題が変化する面白さと、主題が帰ってくる妙味とを是非お楽しみいただきたい。また、この楽章は弦楽器が細分化されて分厚い音のクッションをなし、その頂点にヴァイオリンのソロの主旋律が乗るという立体的な音響を作る。また、主役のソロ・ヴァイオリンとは別に、フルート・ソロも重要な役割を演じる。最初の第1主題の提示で、フルートが模倣する鳥の囀りが強い印象を与える。この鳥の囀りが聴かれるのは一瞬のみで、複雑に音楽が展開するにつれて、鳥の声を聴いたことをしばし忘れてしまう。しかし、楽章の最後の最後で楽章冒頭と同じ鳥の囀りが帰ってくるのだ。この長大な楽章は、鳥に魔法をかけられて見た一瞬の幻だったのだろうか？という神秘的な気分にさせられる。

第4楽章は第2楽章と対になる嵐のような楽章。ただし、第2楽章が突進するような2拍子なのに対し、第4楽章は渦を巻くような4拍子であり、恐ろしさの質はそれぞれ異なる。また、2楽章と4楽章にだけ銅鑼が用いられているのも興味深い。スクリヤービンは特殊打楽器をあまり使わない人だけに、かえって銅鑼の存在が目立つ。銅鑼はロシアの先輩作曲家チャイコフスキーも使った楽器で、特に『悲愴』における死を象徴するひと打ちは印象的だ。スクリヤービンのこの第4楽章では、波状攻撃的に襲ってくる恐怖のクライマックスが来るたびに銅鑼を強打する。やはり死の恐怖の象徴しているのだろう。この死の影を背負った不気味な楽章の終盤、雲間から光明が差しこむような輝かしい音楽の断片がチラつきはじめる。そして切れ目なく続く第5楽章でその輝かしい旋律の全体像が明らかにされる。

第5楽章の主題は第1楽章冒頭でクラリネットによって演奏されたイデー・フィックス主題の変化形だが、提示された時の重々しさが信じられないほど、この楽章では祝祭的な輝きを放っている。そして、第1楽章が楽章全体で巨大な序奏としての役割を負っていたのと同様、第5楽章は楽章全体が祝祭的雰囲気で統一された巨大なエピローグとしての性格を持っている。ただし、力強く鳴らされる最後の一音は、フルート、オーボエ、トランペットなど音の明るい楽器を省いた重々しい音色にしている。祝祭一辺倒では終わらせない心憎い変化球で、スクリヤービンの絶妙の匙加減が生きていると言えよう。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	小松 朋美様	西村 浩輔様
杉本 幸子様	辻 良治様	高岡 拓也様
安藤 美知穂様	西 英子様	和田 之宏様
遠藤 時金様	浅野 節子様	和田 慶子様
井谷 宏美様	金谷 一紀様	玉山 茂夫様
鎗本 和弘様	竹野 繁也様	石川 美保子様
谷口 佳隆様	河内 尚和様	
西坂 壽美子様	森永 千一様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Violine	Bratsche	Flöte	Horn	Pauken
小幡 拓也	小坂 智子	青柳 隆大	北山 絵里	辰巳 仁※
新庄 元子	渡邊 泰里	高松 香陽子 (Piccoloflöte)	黒田 直樹JAMES	
中居 楓子	上田 秀樹・		山影 つぐみ	Schlagzeug
森 亜紀	清水 康映・	鳥山 梢 (Piccoloflöte)	渡辺 悠	福原 紗耶香※
八木 愉希絵	富 研一・			平井 格※
安江 絵美子	古田 直道・	間嶋 美波	Trompete	
渡辺 達之輔	吉川 昌毅・	御園生 香	遠藤 啓輔	
青木 麻須美・	前川 信幸※	山口 佳美	北山 武志	Konzertmeisterinnen
須田 謙史・			東澤 綾	馬渕 清香※
高谷 祐介・	Violoncello	Oboe	芳屋 正幸・	(Schostakowitsch, Scriàbina)
高原 友洋・	多田 進	大王 恵里子		
谷内 優子・	秦野 貴生 (Solo)	丸井 しづか (Englischeshorn)	Posaune	八木 愉希絵
土屋 岳陽・			中村 三鈴	(Reger)
中江 卓郎・	松浦 由香	久保 聖菜※	藤井 舞	
中島 幸・	溝延 知・		宮下 秀行	
西村 祐司・	高村 誠※	Klarinette		事務
宮宇地 秀和・	富 優※	黒田 菜穂子	Tuba	西村 浩
安井 信貴・		関 英子	中塚 隆介※	
安原 由克子・	Kontrabass	山本 拓		
吉川 正剛・	茂原 尚樹			
羽原 興子※	田中 明江	Fagott		
半澤 真衣※	田中 郁太郎	石塚 有里子		
福澤 敬子※	石坪 智美※	桃川 大毅※		
堀川 陽子※	後藤 志帆※	近藤 紀宏※		
馬渕 清香※ (Solo)	丸山 拓史※	(Kontrafagott)		・：団友 ※：客演奏者

弦トレーナー・客演コンサートミストレス

馬渕 清香

大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R. ブレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シェナのギジアーナ音楽祭ギジアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィヴィアン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッピオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンデル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

弦トレーナー

栗原 桢子

相愛女子大学(現相愛大学)音楽学部器楽科弦専攻卒業。大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。退団後は大阪フィル、京都市交響楽団、名古屋フィルハーモニー、日本フィルハーモニーの関西公演などにエキストラ出演。平成12年から10年間アマチュアオーケストラの大坂ハイドンアンサンブルのコンサートミストレスを務める。その後、演奏の傍ら後進の指導にも携わる。

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第36回定期演奏会♪

2015年1月18日(日) びわ湖ホール(大ホール) 指揮:滝本 秀信

ブラームス/悲劇的序曲

エルガー/演奏会用序曲『コケイン』

ショスタコーヴィチ/交響曲第12番

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

~私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。~

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。第36回定期演奏会ではショスタコーヴィチの大作「交響曲第12番」の演奏を目指しており、それに向けて団員を増強しています。「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **(弦楽器急募!!)**

オーボエ・ファゴット・ホルン

【参加資格】練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

【練習日時】毎週日曜日(午後1時~午後5時) 春と秋に練習合宿(大津市内。合宿費は10,000円程度)

【練習場所】京都芸術センター、河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所のほか、大津市など

【諸費用】活動費:3,000円/月 演奏会参加費:20,000~30,000円(学生・初参加の方には割引あり)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123(西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。